

3月下旬から4月上旬にかけ、フサモとクロモで発根がみられ、タヌキモとマツモでは分枝が起きた。いずれの種類も発根・分枝が起きた後、伸長速度が大きくなっ

た。特に、タヌキモ、マツモでその変化が激しかった。浮葉植物のトチカガミは他の種類とやゝ違った伸長パターンがみられた。

知多半島で2番目ヒメコウホネ確認

磯部亮一・中井三従美

知多半島の武豊町市原地内で、ヒメコウホネ *Nuphar subintegerrimum* Makino を確認してからすでに4年程経過している。その間、多数のため池を概観してきたが、ヒメコウホネの生育地は極めて少なく、今年になってようやく常滑市松原三郎谷地内において、群生するため池を新見することができた。まだ花を観察していないので、確実とは言えないが取り敢えず報告しておきたい。

当概地は、常滑市所有の自然林でこれまで陶芸村の設営予定地で、一般の立入りが禁止されていた場所である。

常滑市がここを植栽木中心の松原公園として造成していることを知り、今年2月28日に業者の許しを得て園内の植物など調べてみた。西側の入口から車道が頂上に向かって完備されている。道路の左下に4ヶ所の小さなため池がある。その1ヶ所に水生植物が残存している。

陽気もよくなり、水生植物も生長を始めたことである



ヒメコウホネの浮葉 1987. 5. 6 撮影
知多半島で2番目の産地常滑市松原公園

うと5月1日から再調査を実施中である。地下茎、水中葉、浮葉などの形状から判断して、筆者らはヒメコウホネであろうと確信している。

その他の水生植物として、ホソバミズヒキモの沈水葉、タヌキモ類の生育もこの池で確認している。いずれ花を観察して他の種名も同定したら、常滑市にも進言して後世に残したいと思っております。

教材植物“ヒルギ”を育てる

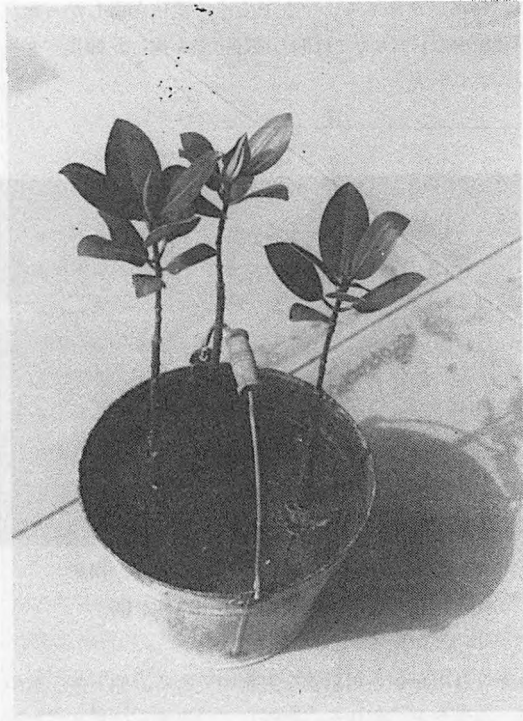
南 敦

ヒルギ(マングローブ)は高等学校「生物」教科書の“生態・分布”、“胎生樹”、“気根”などのところにしばしば出てくる。いままで写真を見せたり、スライドを投影したりしていたが、何とかして実物を見せたいと思っていた。

昭和60年5月、山口県立佐波高等学校教諭で生物担当の池本忠平先生から完全な葉が2枚、側根がわずかに生えたヒルギの小苗を3本いただいてバケツに育てて見た。土は田土、肥料は市販のポットボールをごく少量、水は水道水を用い、大低水深3~8cm、時に水が干上っている。冬は最低5℃以上になる温室に入れている。昭和62年2月30日現在、写真のようによく生育している。授業の時はバケツごと教室にもち込み窓側などに展示してい



図1. 知多半島におけるヒメコウホネの産地



バケツに育てたヒルギ

るが、生徒達は大変感心してよく見てくれる。生物授業はやはり“実物”を見せることである。現在はバケツに植えているが、余り格好のよいものではないので近い内に適当な容器に植えかえる予定である。

このヒルギは池本忠平先生が昭和59年8月2日—6日の日本生物教育会第39回全国大会・沖縄大会の研修で西表島で採集されたものである。種名は小苗なので確実にはわからないが、葉・茎の様子から多分オヒルギであろう。

末筆ながら貴重な小苗を頂戴した池本忠平先生に厚く御礼申しあげる。

兵庫県東播磨地方の水生植物追記(2)

角野康郎

追記(1)(本誌No19, 1985)では、ため池で新たに見出された水草を報告したが、今回はため池以外の水域に生育する水草を5種追録する。

1. ササバモ

東播磨地方の河川は、直接瀬戸内海に流入するいくつ

かの中小河川をのぞけば、ほとんどが加古川水系に属する。その加古川水系に見られる水草の代表的なものが本種である。加古川本流の中流域に相当する西脇市から小野市にかけて、特に多産する。

2. デンジソウ

兵庫県下でもめったに見かけることなくなったデンジソウであるが、加古川(小野市市場町付近)に生育している。昨(1986)年までは水辺から川の中までかなりの群落をつくっていたが、今冬、その場所にブルドーザーが入り川底をならしてしまった(その後新しい工事が始まっているわけではないので何のためにこだけそんなことをしたのか今もってわからない)。そのためにデンジソウ群落は大半が失なわれてしまった。今では、ごくわずか残っているのみである。

3. ミクリ

今まで当地方のミクリ属植物としては、ヤマトミクリしか確認していなかったが、昨年、小野市粟生町付近の加古川の一角にミクリが群生しているのに気づいた。しかし、ここもまた、この冬に行なわれた築堤工事によって被害を受けた。絶滅かと思ったがわずかに残って生育している。

4. ミズハコベ

本種は河川、水路あるいは水田でよく見かけるが、ため池では見ていない。ミゾハコベも同様である。

5. オオフサモ

本種の野生化が日本で最初に確認されたのは当地方においてである。“大正の中頃、須磨遊園地(神戸市須磨区一筆者注)の溝の中に大型の「フサモ」が自生」と記録されている(山鳥吉五郎「阪神地方帰化植物漫談」、兵庫県中等教育博物学雑誌 第3号、昭和14年)。これを牧野富太郎が、当初「スマフサモ」と命名して発表したわけである。牧野博士は須磨寺でも見出したということだが、現在の同寺にはオオフサモは残っていない。“須磨遊園地の溝”もそれがどこをさすのか定かでないが、私は、須磨近辺でオオフサモを見かけたことがない。どうも消えてしまったようである。

一方、山鳥は先に引用した文献の中で、“大正9年、明石公園の外堀に繁茂せることを発見し、ハスを減退させるので除草を企てた”とするしている。こちらのオオフサモは現在まで残り、旺盛に繁茂している。但し外堀からは消え、公園内部の池に多い。これは自然の分布ではないが、オオフサモの帰化の歴史の上からは由緒ある